

プラハのビアホールに関する調査研究

－ ビロード革命から30年間の変遷 －

(音楽教育講座) 市川 克明

A research about "Pivnice" in Prague

– Thirty years of transition since the "Velvet revolution" 1989 –

Katsuaki Ichikawa

(2021年9月1日受理)

序に変えて

キリンビール株式会社によると¹、一人当たりのビール消費量はチェコ共和国が192リットルで首位である²。ピルスナービールに代表されるように、世界有数のホップ生産国（第4位³）でもある。

1993年に松平誠氏により出版された「プラハの浮世酒場」には⁴、プラハのビアホールに関して極めて詳細な記録が記されている。また、19世紀末から20世紀前半にかけてのプラハやチェコ国内のビールとビアホール、そしてそこに集った有名無名の人々について、生き生きと描かれている。単なる旅行案内でも、ビール談義の内容ではなく、まさにビアホールを取り巻く「社会学」としての歴史の記録である。

氏も記している通り、プラハのビアホールには、世界的に有名な作家カレル・チャペク Karel Čapek (1890-1938)、ヤロスラフ・ハシェク Jaroslav Hašek (1883-1923)、フランツ・カフカ Franz Kafka (1883-1924) そしてボフミル・フラバル Bohumil Hrabal (1914-1997) などの著名人が集っていたのはよく知られているが、チェコの歴史上重要な運動がビアホールで行われていたことは注目に値する。1918年、チェコスロヴァキア共和国が独立する前のハプスブルクによる支配、短い共和国時代、ナチスによる支配の時代、さらには社会

主義体制下、言論の自由が保証されていなかったような時代にもこの流れは途絶えることなく続いてきた。むしろそれだからこそ、地下に潜った政治活動は、ビアホールのような一般大衆の集まる場所で醸成されていったとも言える。

ところで、私は2017年、2019年のいずれも夏から秋にかけての3ヶ月間（8月初旬～11月初旬）、外国派遣研究員としてプラハに滞在した。18世紀のプラハの管楽アンサンブルがテーマで、国立博物館附属音楽図書館に連日通い、手稿楽譜資料の研究を行った。その際、空き時間を利用し、「プラハの浮世酒場」に記録されているビアホールを全て訪れ、約25年後の同じ場所がどう変遷し、また、現在はどうのような状態にあるのかを調査した。

また、とりわけ興味深いのは、チェコにおけるビアホールの屋号である。チェコ語ならではの特殊な命名は非常に興味深い。世界的に有名な、「金の虎亭」U zlatého tygra（ウ・ズラテーホ・ティグラ）に代表されるように、動物の名前を冠したもの、また、前置詞 "u" から始まる屋号が非常に多いのが大きな特徴と言える。

本稿は、社会学としてのビアホールに焦点を当て、1991年当時と2017年、2019年の現地調査の記録とその後の研究に基づく。第一章ではプラハ

の現在のビアホールの傾向（1991年との比較）、第1章はプラハのビアホールに関して、第2章は現在のビアホールに関して、第3章はチェコ語によるビアホールの屋号に関して、第4章は現在のチェコとプラハの醸造所に関して詳述し、プラハおよびチェコのビアホールを取り巻く状況を様々な視点から考察した研究報告である。

1. ビアホールの種類

ビールを提供する店舗名は、例えばドイツでは、Restaurant（レストラン）、Bierstube（ビアシュトゥーベ）、Bierlokal（ビアロカール）、Bierhaus（ビアハウス）、Bierpalast（ビアパラスト）、Bierhalle（ビアハレ）、Wirtschaft（ヴィアトシャフト）など様々な種類の店舗があるが、チェコ語でも同様に様々な用語が存在する。すなわち、Restaurace（レスタウラーツェ）、Pivnice（ピヴニツェ）、Hospoda（ホスポダ）、Hostinec（ホスティネツ）などである。本来はその名の通り、食物を提供する、あるいは軽食のみ提供する、あるいはビールのみを提供など区別されていたが、現在ではそれらの区分は曖昧である。例えば、「金の虎亭」はピヴニツェ、「二匹の猫亭」U dvou koček（ウ・ドゥヴォウ・コチェク）はホスポダ、「二つの太陽亭」U dvou slunců（ウ・ドゥヴォウ・シュルンツェ）はホスティネツと称しているが、いずれも同じように様々な料理を提供しており、実際にはレストランと変わらず、特に「二つの太陽亭」は、改装しモダン様式の内装の観光客向けレストランとなっている。したがって、ここでは、その店名に冠されたビアホールの種類は顧慮せず、区別は紹介のみに留めた。

また、屋号であることを明確にするため、日本語での酒場の典型的な屋号である、「亭」、「屋」などを適宜付加した⁵。また、屋号の意味を明確化するため、日本語訳を基本とし、人名に由来するもの、あるいはすでにチェコ語の名称が一般化したものはチェコ語読み方のみとし、初出時に日本語訳を併記した。また、チェコ語をカタカナで表記するのは非常に困難であるが、比較的発音が近

いと思われる表記で記したため、場合によっては一般的な名称と異なる場合もある。

2. プラハとビアホール

松平氏はその著書の序文で、プラハではビアホールが「街区角ごとに必ず1店以上あり」、「都心部のビアホールは観光客の増大によって建て替えが盛んだが、プラハのビアホールの持つ基本的性格は損なわれて」おらず、その性格とは、「コミュニティセンター、それも自治体お仕着せの官製品ではなく、民衆が長いこと時間をかけてつくりあげてきたもの」で、「生活文化を体現」し、「その生態は都市の人類学そのものである」、と述べている⁶。

2.1 プラハの代表的なビアホール

プラハで最も有名な酒場と言える「金の虎亭」には、元アメリカ合衆国大統領 ビル・クリントン Bill Clinton（1946-）とチェコ共和国大統領 ヴァーツラフ・ハヴェル・Václav Havel（1936-2011）の会食（1994年）、ドイツ連邦共和国首相 アンゲラ・メルケル Angela Merkel（1954-）の訪問（2015年）など、世界的著名人も多く訪れ、店内にその際の写真も飾られている。

また、チェコを代表する作家ボフミル・フラバルも「金の虎亭」の常連であり、「毎日午後3時になると、開店の時刻に合わせたかのようにやってきて奥の右側の席に掛け」、ここが彼の応接室であり書齋であった⁷、と言われる。旧市街中心部からカレル橋の間という観光名所に位置するにもかかわらず、伝統的な様式の店構えと内装を保持し、観光客のみならず地元民にも愛されるビアホールである。カウンター席にはフラバルの時代同様、常連客 Štamgast（シュタムガスト⁸）専用席が設けられている。ビロード革命後の「金の虎亭」の元の所有者への返還と改修に関しては、松平氏の著作に詳しい⁹

この他、松平氏は、ビアホールと密接な関係を持った作家として、イグナート・ヘルマン Ignát Herrmann（1854-1935）、ボフミル・フラバル、お

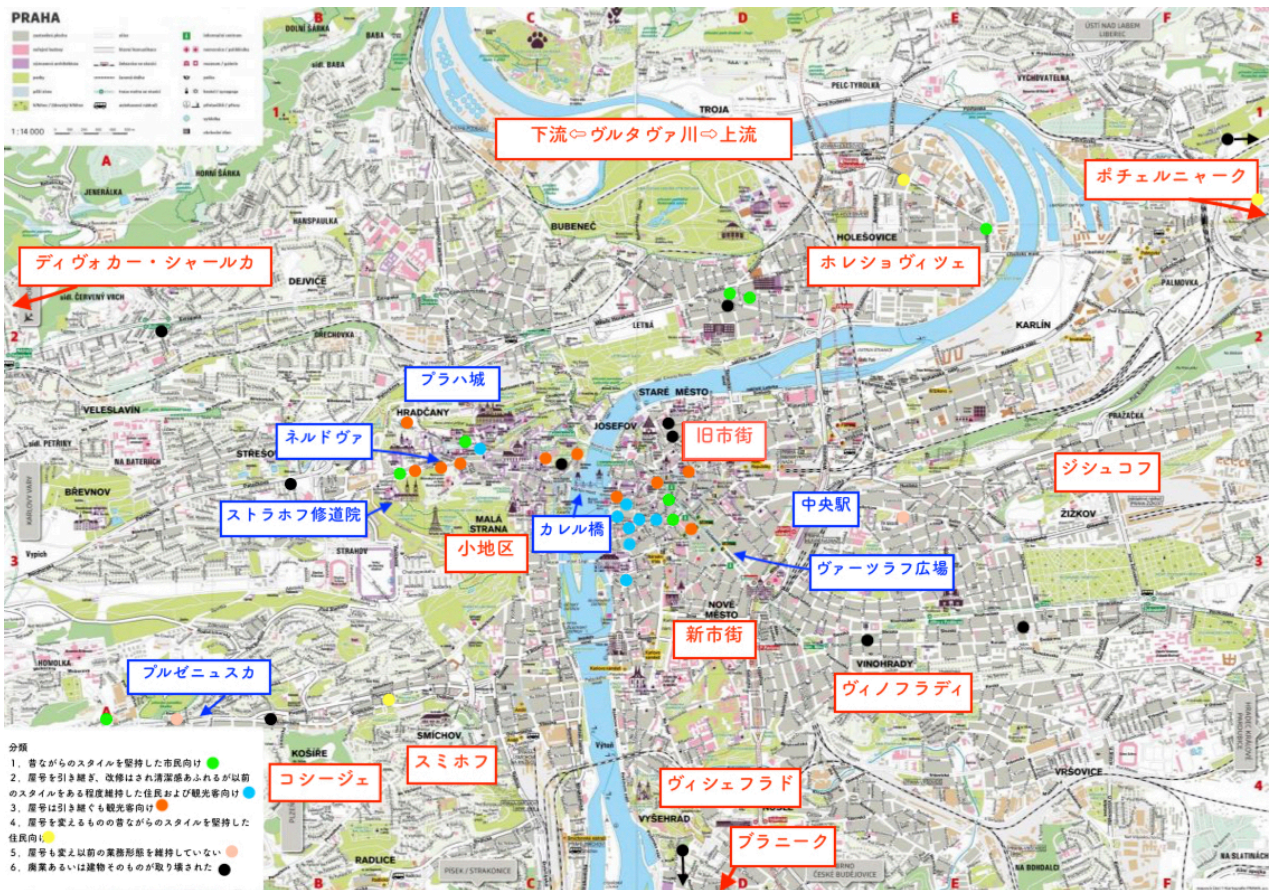


図1：プラハ市中央部の地図

よび、ヤロスラフ・ハシェクの3名を挙げている¹⁰。彼らはその著作の中でプラハのビアホールの様子を生き生きと描写しているだけでなく、ハシェクは「ビアホールで作品を書いた」作家とされている¹¹。特に、新市街地区の「ウ・カリハ」（盃亭¹²）U Kalicha は、彼の代表作「兵士シュヴェイクの冒険」で世界的に有名で、現在ではプラハの代表的な観光名所となっている¹³。

図1はプラハ中央部の地図で、本稿で取り上げる主たるビアホールの場所、あるいは地区の名称を記入している¹⁴。また、第2章の第1～5節で取り上げるビアホールのおおよその位置を示し、色分けした○印で分類した。

2.2 「法の枠内における穏健なる進歩の党」

第一次世界大戦前のハプスブルク帝国の末期、政治的に完全な独立を獲得していなかったチェコでは、完全独立に向けた様々な政治活動が行われていた。プラハの住宅地ヴィノフラディの「ズヴィエジナ亭」U Zvěřinů（ウ・ズヴィエジヌー¹⁵）と

いう酒場の人気を盛り上げるため、有名人を呼び寄せることを目的に、この政治酒場を中心とする政党を作り、そこにハシェクが積極的に関わることとなった¹⁶。ハシェクはそれに乗じて、1911年、「法の枠内における穏健なる進歩の党」Strana mírného pokroku v mezích zákona という政党を結成、これは規制組織や体制の枠内で社会を改革しようとする政治家たちを嘲るパロディであった。この酒場で、なかば冗談、なかば本気の政治活動を開始、集った文化人グループにはフランツ・カフカもいたと言われる¹⁷。

「法の枠内における穏健なる進歩の党」の本部は、「ズヴィエジナ亭」から改称された「牛小屋亭」Kravin に置かれた¹⁸。現在は、その場所には存在せず同名のレストランが、近くの平和広場 Náměstí Míru（ナームエスティ・ミール）に存在するが、直接の関係は無く、単に歴史的な店舗名を使用している、とのことである¹⁹。

同党の選挙演説を「牛小屋亭」で終えた後夜遅く帰宅したハシェクは、紙切れに走り書きをした

後寝込んでしまったが、そこに「中隊のバカ」という表題と「一人前の兵士として行動できるよう合格の認定をうるため、自ら進んで身体検査を受けた」、というようなことが書いてあった、と後に夫人は回想している²⁰。すなわち、「兵士シュヴェイク」アイディアの源泉であり、いかにもハシエらしいエピソードと言える。

1912年にはハシエは、「法の枠内における穏健なる進歩の党の政治的・社会的歴史」Politické a sociální dějiny strany mírného pokroku v mezích zákona という著作の刊行を企画、しかし、その激しい政治批判のため出版は中止となった²¹。

同党の拠点はヴィノフラディ地区の「金のリットル」U zlatého litru (ウ・ズラテーホ・リトゥル)、「蠟燭亭」U svíčky (ウ・スヴィーツキ)、「スラヴのカフェ」Slovanská kavárna (スロヴァンスカー・カヴァルナ)、「幸福亭」U bláhů (ウ・ブラーフー)であるとハシエは述べており、特に「金のリットル」での集会は「我が党の総会ともいべきもの」と記している²²。また、このビアホールはボヘミアンの文士の溜まり場と言われ²³、ハシエの「法の枠内における穏健なる進歩の党の政治的・社会的歴史」の中では、最も頻繁にその名が現れる²⁴。

ハシエは、「アルコールは、政治的自覚をうながす。アルコールは魂に刺激を与えて、弁士の言葉を受け入れ易くする。アルコールはどの政党にとっても、党員に規律を守らせる一種のウォームアップである。ビールのジョッキ一杯で、魂が買取される」²⁵、また、「ハンガリー人はワインで」、「私たちの国ではビールのジョッキで政治をする」、と記すなど²⁶、彼のビールへの愛着と政治に対するスタンスが示唆されている。

19世紀半ばから20世紀前半にかけては、チェコ民族の政治的な活動が活発で、ビアホールはそのような活動の集會に使われた。その際、それぞれの団体や政党は特定のビアホールを拠点とするなど、密接な関係を持っていた²⁷。

後の、社会主義時代にも水面下での様々な反政府的な活動は、このようなビアホールで行われていたらしい。例えば、国民劇場裏手の「歌手乃屋」U zpěváčků (ウ・スピーヴァーチクー)では、1970年代から1980年代に、ヴァーツラフ・ハヴェルを含む著名な反体制派が集まる場所となった²⁸。特に、1989年1月15日以降、市民による大規模な民主化要求デモが始まった²⁹。さらに、8月にはドイツ民主共和国から移動した東独市民がプラハの西ドイツ大使館に移住を求めて詰めかけ、9月になり出国が認められ、そのような一連の流れが11月17日のビロード革命につながったと言える。その際、ビアホールの果たした役割は小さくはないと言われているが、今回は伝聞以上の情報は得られなかったので割愛する。

2.3 「ビール友の党」と「牡猫亭」

1990年1月、プルゼニで「ビール友の党」Strana Přátel Piva が結成され³⁰、1万5千もの党員を集めるものの、1990年の国政選挙では0.12% の得票率で惨敗した。当時、経営不振に悩むプラハを代表するビアホール「牡猫亭」U kocoura (ウ・コツォウラ)を同党が肩代わりし党本部とした³¹。「法の枠内における穏健なる進歩の党」にしても、「ビール友の党」にしても、いかにチェコ国民がビールやビアホールを愛しているかの証とも言え、このことが本研究を行うきっかけのひとつとなった。

3. 現在のビアホールの傾向

1989年のいわゆる「ビロード革命」以後、とりわけ1990年代半ばごろから、チェコ国内の経済は大きく発展し、特にプラハ、チェスキー・クルムロフ、クロメルジーシュ、カルロヴィ・ヴァリといった街では観光の中心地として地域経済を牽引した。さらに、2002年のヨーロッパ連合に加入、シェンゲン条約により国境での旅券審査が撤廃されると、隣国ドイツやオーストリアなどドイツ語圏から、次いでヨーロッパ各地より観光客が訪れ、プラハのビアホールも再建あるいは改修され、

1990年前後とは全く異なる様相を呈するようになった。

そこで、2017年、2019年の2回に渡り松平誠氏の著書「プラハの浮世酒場」に掲載されている全てのビアホールを中心に、プラハ市内のビアホール約100件を実地見聞し調査を行った。ここでは、松平氏の取材当時（1991年）と比較し考察する。

また、私自身、1988年12月、1993年8月、1995年3月、1997年8月、そして在独で留学中（2000年～2014年）にプラハを数十回訪れた。それらの経験をもとに、松平氏の著書、および最新の情報を調査し報告する。

3.1 ビアホールの分類

全体的には、多くの店舗が改修され、その多くは全く異なる内装になっているものもあったが、完全に別様式のモダンな内装の別店舗に変わっていたものも多く、また、廃業、あるいは建物そのものが取り壊されていたケースもあった。

それらは以下の6つのカテゴリーに分類できる。（図1参照）

1. 昔ながらのスタイルを堅持した市民向け●
2. 屋号を引き継ぎ、改修はされ清潔感あふれるが以前のスタイルをある程度維持した住民および観光客向け●
3. 元の形を留めず、屋号は引き継ぐも観光客向け、完全にモダンな造り●
4. 屋号を変えるものの昔ながらのスタイルを堅持した住民向け●
5. 屋号も変え以前の業務形態を維持していない●
6. 廃業あるいは建物そのものが取り壊された●

これらの分類は、主観的な部分もあり、また、分類が難しいケースも散見された。特に市民向け、観光客向けの分類は極めて不明瞭である。また、「昔ながら」の定義も曖昧で、差し当たり、以下のような様々な要素を実際に訪問した際の調査を加味し分類した。

●内装が1990年前後とあまり変わらない。

●ビールの値段が比較的安価（例：2019年当時、0.5リットルのプルゼンスキー・プラズドロイ Plzensky Prazdoroj（ピルスナー・ウァクヴェル（ウルケル） Pilsner Urquell「ピルゼンの源泉」³²⁾ 30-36コルナ（150-180円）を目安にした）。

●基本的に伝統的な長机、長椅子を使用、場合により4～8人用机、椅子を使用。

●メニューがチェコ語のみ。

3.1.1 昔ながらのスタイルを堅持した市民向け

この例は、それほど例が多くないように見受けられる。松平氏の著作をもとに考察すると、2017年、あるいは2019年に伝統的な内装と庶民向けの雰囲気堅持したビアホールは、市内中心のヴァーツラフ広場の端、ムーステク交差点の近くで狭い路地にある「鹿乃屋」U jelínků（ウ・イエリンクー）³³⁾、同広場の近くの「ブラニークの酒蔵」Branický sklípek（ブラニツキー・スクリーペク）、ロレッタ教会近くのロレッタ広場に面する「黒牛亭」U černého vola（ウ・チェルネーホ・ヴォラ）である。場所柄、観光客も多いものの、地元民も多く、基本的に食事類は乏しい。これらは、「プラハの浮世酒場」に掲載されているビアホールである。

このうち、「鹿乃屋」や「ブラニークの酒蔵」はほぼ市民向けと思われ、基本的にビール専門でソーセージやウトペネツ（「水死体」の意味、酢漬けの白ソーセージでチェコの伝統的料理）、あ



写真1：ウトペネツ Utopenec とチェコのパン

表1 昔ながらのスタイルを堅持した市民向けビアホール

番号	名称 (日本語)	名称 (チェコ語)	種類	地区
27	鹿乃屋	U jelínků (ウ・イエリンクー) (Jelínkova plzeňská pivnice)	Pivnice	市街地 (観)
24	ブラニークの酒蔵	Branický sklípek (ブラニツキー・スクリーペク)	(Restaurace)	市街地 (観)
1	黒牛亭	U černého vola (ウ・チェルネーホ・ヴォラ)	Pivnice	プラハ城 (観)
51	湊屋	U přístavu (ウ・プヂースタヴ)	Hostinec	ホレショヴィツェ (住)
47	ナ・パリアールツェ	Na Paliárce (ナ・パリアールツェ)	Restaurace	ホレショヴィツェ (住)
46	ナ・ムエルニーツェ (ナ・ムエルニーク)	Na Mělníce (ナ・ムエルニーツェ) Na Mělníku (ナ・ムエルニーク)	Restaurace	ホレショヴィツェ (住)
40	ラドロンカ	Ladronka (ラドロンカ)	Restaurace	市西部 (住)

るいはスナック類などの軽食のみが提供され、メニューもチェコ語のみ、ビールの値段も極めて低額である。なお、「ブラニークの酒蔵」に隣接し同名のレストラン「ブラニークの酒蔵ー市長亭」Branický Sklípek – U Purkmistra (ブラニツキー・スクリーペク〜ウ・プルクミストウラ)があり、これは、カテゴリー2に入ると言える。

プラハ城に続く坂道であるネルドヴァ通りの裏手³⁴、イギリス大使館にほど近い「河馬亭」U hrocha は、観光名所に近いにもかかわらず、地元民が多い³⁵。メニューの英語表記は無い。

住宅地ホレショヴィツェ地区の「湊屋」U přístavu (ウ・プヂースタヴ)、「ナ・パリアールツェ」Na Paliárce、「ナ・ムエルニーツェ」Na Mělníce (「ナ・ムエルニーク」Na Mělníkuと改称している³⁶)も改装しているものの、地域住民向けのビアホールである。この区域は、プラハ中心部より少し離れ、また、地下鉄駅からも遠く、周りには観光名所も無いため、この地区の宿屋の宿泊客以外の観光客はほとんど訪れない。1991年当時の記述では、「湊屋」は、無休で朝6時から22時までの営業、「ヴルタヴァ川ホレショヴィツェ港前、船舶入港の際に混雑する。朝呑みたい人向き、暖房時にはたばこの煙が充満して」いた³⁷。現

在は船舶入港時の混雑は無く、月曜から営業時間は金曜が8時から22時、土曜日曜が10時から22時である。しかし、当時の雰囲気は保持しており、どの時間においても観光客が訪れる様子はない。

「ナ・パリアールツェ」は、「ロマ人がよくくる。ヴァイオリンを弾くものもいる。乳母車が置いてあることもある。」と記述されているが³⁸、非常に美しく改装を施してあるものの、その雰囲気は現在でも残っている。

市街地から市電で20分以上かかる、非常に長い幹線道路プルゼニュ通りに面した「ラドロンカ」Ladronka は、1991年当時は「今にも壊れそうな古いビアホール」と記載されているが³⁹、2017年の訪問時は非常に美しく改装されていた。伝統的内装ではないものの庶民的な雰囲気 of 地域住民向けの店舗である。なお、店舗名は市西部にある大きな「ラドロンカ公園」に由来する。

3. 1. 2 屋号を引き継ぎ、昔ながらのスタイルをある程度維持した住民および観光客向け

観光名所であるプラハ中心部位置する、「金の虎亭」、「ウ・フレクー」U Fleků (ウ・ウレクー)、「仔熊亭」U medvídků (ウ・メドゥヴィードクー)⁴⁰、「ウ・ヴェイヴォドゥー」U

表2 屋号を引き継ぎ、昔ながらのスタイルをある程度維持した住民および観光客向け

番号	名称 (日本語)	名称 (チェコ語)	種類	地区
6	牡猫亭	U kocoura (ウ・コツォウラ)	Hostinec	プラハ城 (観)
12	金の虎亭	U zlatého tygra (ウ・ズラテーホ・ティグラ)	Pivnice	市街地 (観)
19	二匹の猫亭	U dvou koček (ウ・ドゥヴォウ・コチェク)	Hospoda	市街地 (観)
23	ウ・フレクー	U Fleků (ウ・ウレクー)	Restaurace Pivovar	市街地 (観)
18	仔熊亭	U medvídků (ウ・メドゥヴィードクー)	Restaurace Pivovar Hotel	市街地 (観)
17	ウ・ヴェイヴォドゥー	U Vejvodů (ウ・ヴェイヴォドゥー)	Restaurace	市街地 (観)
33	ウ・カリハ	U kalicha (ウ・カリハ)	Hostinec	新市街 (住・観)
16	ベツレヘム修道院	U Betlémské kaple (ウ・ベトウレームスケー・カペレ)	Restaurace	市街地 (観)
22	歌手乃屋	U zpěváčků (ウ・スピェヴァーチクー)	Restaurace	新市街 (観)

Vejvodů⁴¹、「二匹の猫亭」、「ベツレヘム修道院」U Betlémské kaple (ウ・ベトウレームスケー・カペレ)、「歌手乃屋」は、2003年大幅に改装しているものの、昔ながらの伝統的なチェコ様式の内装を保持したビアホールである。

最も有名でプラハのみならずチェコを代表するビアホールである「金の虎亭」は、1702年に建物の屋号が「金の虎」になりレリーフが建物に取り付けられるまでは、「黒いライオン」U černého lva であった。1816年にビアホールが開業、以来政治家、芸術家、作家など多くの著名人が訪れた。

上記のビアホールは、様々な観光ガイドにも紹介されており、旧市街広場やヴァーツラフ広場にも近く、多くの観光客が訪れている。同時に、昔ながらの雰囲気維持し、調度品なども歴史的なものを多く使用している。また、ビールの値段もそれほど高価ではなく、プラハの一般市民たちも多く訪れるビアホールと言える。また、プラハ城に続くネルドヴァ通りの入り口の角にある「牡猫

亭」も、観光ルートに位置しているにもかかわらず、地元民向けのビアホールである⁴²。

「ウ・カリハ」は、新市街の地下鉄C線イー・ペー・パヴロヴァ駅の近くにあり、観光地からはある程度離れているが、ヤロスラフ・ハシェクは常連客であり、また、代表作「兵士シュヴェイクの冒険」の中でも実際にその名が現れ⁴³、内装もシュヴェイクや、シュベイクにちなんだいたずら書きをウリにしている。そのため、プラハを代表する観光名所となっている。

3. 1. 3 屋号は引き継ぐも観光客向け

旧市街広場に面する「王子亭」U Prince (ウ・プリンツェ) ⁴⁴、そこからカレル橋に向かう途中の観光客の多い通りに位置する「ウ・マルヴァゼ」U malvaze、ヴァーツラフ広場の入り口近くの「ウ・ピンカスー」U Pinkasů、ヴルタヴァ川沿いの観光名所マラー・ストラナ (小地区) の「二つの心亭」U dvou srdcí (ウ・ドゥヴォウ・スルドチー)、「ウ・シュネルー」U Schnellů、プラハ城に上るネルドヴァ通りの途中にある「ボナパル

表3 屋号は引き継ぐも観光客向け

番号	名称 (日本語)	名称 (チェコ語)	種類	地区
15	王子亭 (ウ・プリンツェ)	U prince (ウ・プリンツェ)	Restaurace Hotel	市街地 (観)
14	ウ・マルヴァゼ	U malvaze (ウ・マルヴァゼ)	Restaurace Hotel	市街地 (観)
13	ウ・ピンカスー	U Pinkasů (ウ・ピンカスー)	Restaurace	市街地 (観)
10	禿鷹亭	U supa (ウ・スパ)	Hostinec	市街地 (観)
7	二つの心亭	U dvou srdcí (ウ・ ドゥヴォウ・スルドチー)	Restaurace	小地区 (観)
25	ウ・シュネルー	U Schnellů (ウ・シュネルー)	Restaurace Hotel	小地区 (観)
5	ボナパルト亭	U Bonaparta (ウ・ボナパルタ)	Restaurace	小地区 (観)
4	二つの太陽亭	U dvou slunců (ウ・ ドゥヴォウ・スルンツー)	Hostinec	小地区 (観)
2	旧市庁舎亭	Ve staré radnici (ヴェ・ スタレー・ラドニーチ)	Restaurace	プラハ城 (観)
31	金の梨亭	U zlaté hrušky (ウ・ズラテー・フルシュキ)	Restaurace	プラハ城 (観)

ト亭」U Bonaparta、「二つの太陽亭」U dvou slunců (ウ・ドゥヴォウ・スルンツー)、プラハ城からロレッタ教会あるいはストラホフ修道院に向かう観光客の多い通りの入り口に位置する「旧市庁舎亭」Ve staré radnici (ヴェ・スタレー・ラドニーチ)、プラハ城裏手の「金の梨亭」U zlaté hrušky (ウ・ズラテー・フルシュキ)などは、屋号は1991年当時のものを引き継ぐものの、モダンな様式の内装で、また、ビールの値段もかなり高額に設定され、観光客向けであると言える。例えば、2019年当時、庶民向けビアホールのピルスナー・ウルケル 0.5l が、街中では30-36コルナ (150円程度)であったのに対し、上記の「旧市庁舎亭」では110コルナ (550円程度)であった⁴⁵。

「二つの太陽」の建造物では、19世紀のチェコを代表する作家・詩人ヤン・ネルダ Jan Neruda (1834-1891) が生まれた⁴⁶、この通り「ネルドヴァ」の名称の由来となっている。

注意したいのは、2. 2 で述べたいくつかのビアホールは、この 2. 3 との区別が極めて曖昧な例が

見受けられることである。例えば、「ウ・カリハ」は、記述の通り兵士シュヴェイクの店として有名なため、観光客が絶えず訪問するビアホールであるが、同時に、プラハ住宅地の一角にあり、地元民も訪れる。したがって、分類は非常に苦慮した。

3. 1. 4 屋号を変えるものの昔ながらのスタイルを堅持した住民向け

ホレショヴィツェ地区の中心広場であるオルテノヴォ広場の近くの「角屋」V zákoutí (ヴ・ザーコウティー) は、現在、「漁師亭」U rybáře (ウ・リバージェ) と改称しているが、1991年当時とほとんど変わらない内装で営業している。店内は、歴史的な写真や置物で飾られており、基本的には地域住民、あるいは付近の勤労者が主たる客層である。なお、品書き表記はチェコ語のみである。

住宅地であるヴルタヴァ川左岸の地下鉄B線アンジェル駅から市電に乗り換え5分ほどのマロストランスカー墓地の裏にあった「ウ・ブラマーンカ」U Bramánka は、「黒い丘の下亭」Pod černým

表4 屋号を変えるものの昔ながらのスタイルを堅持した住民向け

番号	名称 (日本語)	名称 (チェコ語)	種類	地区
53	角屋 【漁師亭】	V zákoutí (ヴ・ザーコウティー) 【U Rybáře (ウ・リバーヂェ)】	Restaurace	ホレシヨヴィツェ (住)
19	ウ・ブラマーンカ 【黒い丘の下亭】	U Bramánka (ウ・ブラマーンカ) 【Pod černým vrchem (ポド・ チェルニーム・ヴルヘム)】	Restaurace	ヴルタヴァ川左岸・ スミホフ (住)
27	鹿乃屋 【ポチェルニャーク醸造 所】	U jelínků (ウ・イエリンクー) 【Pivovar Počernák (ピヴォヴァ ル・ポチェルニャーク)】	Restaurace Pivnice	市東部・郊外 (住)

【 】内は改称後の名称

表5 屋号も変え以前の業務形態を維持していない

番号	名称 (日本語)	名称 (チェコ語)	種類	地区
35	教会の上手亭 【ビールとソーセージ】	Nad kostelem (ナド・コステレム) 【Pivo a párek (ピヴォ・ ア・パーレク)】	Pivotéka	中央駅裏・ ジシュコフ (住)
27	「ナ・ツイブルツェ」 【テニス亭】	Na Cibulce (ナ・ツイブルツェ) 【U Tenisu (ウ・テニス)】	Restaurace	市西部・ コシージェ (住)

【 】内は改称後の名称

vrchem (ポド・チェルニーム・ヴルヘム) と改称しているが、伝統的な内装と雰囲気を持し、地元住民向けの営業を行なっている。



写真2：旧「ウ・ブラマーンカ」U Bramánka

プラハ市街地より近郊電車で15分程度の郊外の住宅地でプラハ・ポチェルニーツェ駅前の「鹿乃屋」U jelínků (ウ・イエリンクー) は、2019年に

全面改装し「ポチェルニャーク醸造所」Pivovar Počernák と改称している⁴⁷。

3. 1. 5 屋号も変え以前の業務形態を維持していない

プラハ中央駅裏手の住宅地 ジシュコフ Žižkov に存在した「教会の上手亭」Nad kostelem (ナド・コステレム) は、2019年現在、「ビールとソーセージ」Pivo a párek という軽食店になっている。この店は、チェコ国内の様々な地域からのビールを週替わり、あるいは一定期間で銘柄を入れ替えるという形で提供するというコンセプトで、料理はソーセージ料理を中心とした軽食のみ

表6 廃業・建物そのものが取り壊されている

番号	名称 (日本語)	名称 (チェコ語)	種類	地区
28	旧学校亭	U staré školy (ウ・スタレー・シュコリ)	建物取り壊し (ホテル敷地)	市街地 (観)
11	クルショヴィツカー酒場	Krušovická Pivnice (クルショヴィツカー・ピヴニ ーツェ)	廃業 (ブティック)	市街地 (観)
8	聖トマス修道院	U sv. Tomáše (ウ・ スヴァターホ・トマーシェ)	廃業 (閉鎖)	小地区 (観)
32	牛小屋亭	Kravin (クラヴィン)	移転後別店舗で	ヴィノフラディ (住)
52	ウ・ソイクー	U Sojků (ウ・ソイクー)	廃業 (チェコスロバ キア貿易銀行)	ホレショヴィツェ (住)
48	一軒家	Na samotě (ナ・サモティエ)	建物取り壊し (駐車場)	ホレショヴィツェ (住)
44	丘の下亭	Pod vrchem (ポド・ヴルヘム)	廃業 (住宅建設 協同組合プラハ 6区)	市西部 (住)
42	四つ角亭	Na rozcestí (ナ・ロズツェステイ)	建物取り壊し (公園)	市西部 (住)
45	カイェターンカ亭	U Kajetánky (ウ・カイェターンキ)	高層住宅	市西部 (住)
57	醸造所	U pivovaru (ウ・ピヴォヴァル)	高層住宅	市東部 (住)
36	昔の鍛冶屋	Na staré kovárně (ナ・ スタレー・コヴァルニェ)	建物取り壊し (空き地)	市南部 (住)

である。また、リーズナブルな価格で地域住民に向けての営業を行っている。

また、「ナ・ツイブルツェ」Na Cibulce (ナ・ツイブルツェ)のように、コシージェ地区 Košiče の丘陵地の中腹に存在しこの地の森林公園の名称を屋号とするものの、現在では「テニス亭」U Tenisu と全く別の店舗として開業している例もある。その名称の通りテニスコートを完備し、テニス教室などを併設した複合的なレストランとなっている⁴⁸。

3.1.6 廃業・建物そのものが取り壊されている

2017年訪問の際、建物そのものが取り壊されていたのは、ピルゼン大通りに面した「四つ角亭」Na rozcestí、いくつもの高層集合住宅のあった

「丘の下亭」Pod vrchem (ポド・ヴルヘム)、「カイェターンカ亭」U Kajetánky (地域の名)、「醸造所」U pivovaru (ウ・ピヴォヴァル)、市南部のブラニーク地区の「昔の鍛冶屋亭」Na staré kovárně (ナ・スタレー・コヴァルニェ)、ホレショヴィツェ地区の「一軒家」Na samotě (ナ・サモティエ)も取り壊されている。これらはいずれも住宅地に存在していた。

国立博物館裏の住宅地ヴィノフラディ地区にある「平和広場」近くに存在した「牛小屋亭」は、廃業し別店舗となっている⁴⁹。カレル橋に近い路面電車の通りに存在した「聖トマス修道院」U sv. Tomáše (ウ・スヴァターホ・トマーシェ)は、廃業閉鎖されている。住宅地であるホレショヴィツェ地区のメインストリートに存在した、「ウ・ソイ

クー」U Sojků (1925年創業)は「金の虎亭」と並びプラハを代表するビアホールであったが、2010年廃業し⁵⁰、現在、チェコスロバキア貿易銀行の支店となっている。

1991年当時、一つの店舗において、ピルスナー・ウルケル、ブディエヨヴィツキー・ブロヴァル Budějovický Budvar (ドイツ名 Budweiser Budvar ブドヴァイゼル・ブドヴァル⁵¹)、ブランク Branik (地域の名称)、スタロプラメン Staropramen (古い泉)など特定の銘柄のビールのみを提供することが多かったが、この「ウ・ソイクー」では、ピルスナー・ウルケル以外にも、例えばチェコ南西部の街ドマジュリツェの醸造所 Pivovar Domažlice の「市長」Purkmistr なを始め、様々なビールを提供していた⁵²。

3.2 総括

プラハはヨーロッパを代表する観光都市であり、その見所は多く、主として旧市街、ヴァーツラフ広場、およびヴルタヴァ川にかかるカレル橋を渡り、川の左岸の「小地区」(マラー・ストラナ)から、プラハ城、およびロレッタ教会、ストラホフ修道院に到る区域がその中心地である。これらの地区では、多くは、屋号も変更せず伝統的なスタイルのビアホールも多く、同程度にモダンな作りのもの、そして少数の地域住民中心のビアホールなどが存在する。また、ホレショヴィツェ地区など、観光客があまり訪れず(宿泊客は多い)地域住民向けのビアホールが多い地域では飲食物が廉価で提供されている。郊外の住宅地では廃業したビアホールも多く、存続しているものは、屋号が変わったとしても比較的伝統的なスタイルを維持している。

1991年当時は、それ以前の社会主義時代より存在していた労働者の高層集合住宅地の中に多くのビアホールが存在した⁵³。私有財産返還に伴い、これらのビアホールの入っている建物が元の所有者に変換され、場合によっては廃業、別業種に変換というケースが多く起こった⁵⁴。カテゴリー5で表示したうち廃業したビアホールの多くは住宅地に

あることは注目に値する。交通機関が発達し、また、住宅地と商業地、観光地がはっきりと分かれ、住宅地の小規模ビアホールが廃業する、といったことがここ20年あまりの間に進行したと言える。また、再開発により、伝統的なビアホールや小規模店舗が取り壊される例も極めて多い。例えば、社会主義時代末期の1986年には、ヴルタヴァ側左岸の住宅地スミホフ地区再開発および地下鉄新線工事(地下鉄B線)に伴い多くの小規模店が消滅した。以前は、この地域は街の中心からは離れた郊外の住宅地であったが⁵⁵、地下鉄開通後、人口が増え、現在では地下鉄アンジェル駅付近は、巨大なショッピングモールとなっておりプラハの副都心となっている。

4. ビアホールの屋号について

この研究のきっかけとなったのは、チェコのビアホールの特徴ある屋号である。前置詞 "u" を冠する屋号が多く、また名称も独特のものが多い。

4.1 前置詞 "u", "nad", "pod", "v (ve)"

前置詞で始まる屋号は非常に多く、日本の、「亭」や「屋」がこのような店舗の名称に用いられるのと類似している。"U zlatého tygra" (金の虎亭)、"U Fleků" (ウ・フレクー)を始め、"U dvou koček" (二匹の猫亭)、"U Pinkasů (ウ・ピンカスー)、"U Schnellů" (ウ・シュネルー)、"U přístavu" (湊屋)、Nad kostelem (教会の上手亭)、Ve staré radnici (旧市庁舎亭)など、非常に多い。

とりわけ前置詞 "u" を冠する屋号が多いが、例として、スタニスラフ・ムスィル著の「プラハの古い醸造所の栄光と終焉、第2巻 - 新市街」に掲載されている、19世紀から20世紀前半にかけてプラハ新市街に存在した27の醸造所のうち24は前置詞 "u" から始まる⁵⁶。このような例は、何もビアホールや醸造所に限ったことではなく、宿屋・旅館、料理屋、カフェなどの屋号も同様で、本来は住所表示がはっきりしていなかった時代の、建物の名称に由

来するもので現在でも残るチェコの屋号の伝統と言える。

前置詞 "u" は、生格を取り⁵⁷、「～の」、「～のところに」、「～のもとに」、「～の近くに」などの意味を持つ。ドイツ語の "bei"、英語の "by" に相当する。例を挙げると、"U (～の) zlatého (形容詞 zlatý 男性単数生格「金の」) tygra (名詞 tygr 男性名詞単数生格「虎」) となる。

前置詞 "u" 以外では、Nad kostelem (教会の上手亭)、Pod černým vrchem (黒い丘の下手亭) など "nad" (上に) や "pod" (下に) も頻繁に使用される。これらは、丘や教会、あるいは固有名詞などの建物や地域名とともにによって使用され、ビアホールはそれらの上手あるいは下手に位置する。

"nad" は「～の上方に」(ドイツ語 über, 英語 over)、「pod" は「～の下方に」(ドイツ語 unter, 英語 under) の意味を持ち、いずれも屋号のように状態を表す場合には造格を取る。例えば、"Pod (～下方に) černým (形容詞 černý 男性単数造格「黒い」) vrchem (男性名詞 vrch 男性名詞単数造格「丘」)" となる。

この他にも、V zákoutí (角屋) や Ve staré radnici (旧市庁舎亭) など、位置する場所や公共施設に由来する場合には、「v" あるいは "ve" (～の中に) が用いられる。

"v" は「～の中に」、「～の中へ」(ドイツ語 in, 英語 in) を意味し、屋号の場合には位置を表し前置格を取る。また、続く単語が "v" や "f"、あるいは2つ以上の子音で始まる場合には "ve" となる。"Ve (～の中に) staré (形容詞 starý 女性単数前置格「古い」) radnici (男性名詞 radnice 女性名詞単数前置格「市役所」)" である。

4.2 使用される名称 (名詞)

チェコ語の店舗名にも特徴があり、動物を用いた例が非常に多い。その他、植物、場所、人名を屋号にした例も頻繁に現れる。また、形容詞や数詞を伴った例も非常に多い。

4.2.1 動物の名前を使用した例

「金の虎」、「白獅子亭」U bílého lva、「黒牛亭」、「三匹の金獅子亭」U tří zlatých lvů (ウ・トゥシ・レヴー)、「鹿乃屋」、「仔熊亭」、「河馬亭」、「二匹の猫亭」などの動物の名称を使用した例は非常に多い。この他、「秃鷹亭」、「黒鷲亭」U černého orla (ウ・チェルネーホ・オルラ)、「鶴乃屋」U jeřába (ウ・イエジャーバ) などの鳥の名称、さらに「金のカマス亭」U zlaté štiky など魚の名称が使用されることもある。

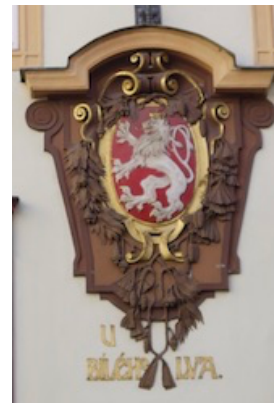


写真3: 「白獅子亭」U bílého lva のレリーフ

これらは、前置詞 "u" が冒頭に冠せられ、続き、数詞や色を表す語が挿入されることもある。この動物の名称を使用する例は、数は減少しているものの、ドイツ語圏、とりわけ南独でもこのような例は存在している。例えば、「黒鷲亭」"Zum schwarzen Alder" のような例である。

4.2.2 花や果物など

「金の梨亭」、「三本のバラ亭」U tří růží (ウ・トゥジ・ルージ)、「緑の木亭」U zeleného stromu (ウ・ゼレネーホ・ストロム) など動物ほどの頻度ではないにしても多くの屋号が花や果物にちなんで名付けられている。動物の例同様、前置詞 "u" が冠される場合が多い。

4.2.3 場所に由来する例

この分類では、「教会の上手亭」、「旧学校亭」U staré školy、「旧市庁舎」、「醸造所」、「ベツレーム礼拝堂」、「湊屋」、「市場亭」Na tržišti、「昔の鍛冶屋亭」など施設あるいはその名

称に因むもの、また、「聖トマス修道院」、「旧プラハ市長公舎」など、建物の固有名詞が用いられた例もあるが、これらは本来の建物の用途であった、あるいはその可能性が高い。

例えば、プラハ中央駅の裏手の住宅地区ジシュコフに存在した「教会の上手亭」は、路面電車通りに面した聖プロコピウス教会脇の坂を上った場所に位置していた。また、廃業しているが、「旧学校亭」は、その近隣に同名の通りに由来すると思われる。この地域はユダヤ人地区で、シナゴグや学校などがあり、18世紀にはすでにこの通りの名称が見られる⁵⁸。

「丘の下亭」、「角屋」、など、目印になる場所を表すもの、「カイェターンカ街」、「ヴィシェフラッドの下手亭」Pod Vyšehradem⁵⁹、「壺亭」U Džbánu (ウ・ジュバーヌ) など通りや場所の名称に因むものなどがある。「丘の下亭」は、その名の通り、店の後方には小高い丘が広がっている。「角屋」はホレショヴィツェ地区のメインストリートの裏手にあり、その名の通り路地が交差する「角」に位置する。プラハ市の郊外、「ディヴォカー・シャルカ」Divoká Šárka の名を持つ岩山からなる地域にほど近い場所に⁶⁰、「ジュバーン貯水池」Vodní nádrž Džbán (壺) という名称の大きな湖があり、近くを通る幹線道路沿いに「壺亭」がある⁶¹。

また、「ブラニーク酒蔵」、「ピルゼンの中庭」Plzeňský Dvůr、「クルショヴィツカー酒場」Krušovická Pivnice、「酒蔵亭」Ve sklípku など、醸造所あるいは醸造所で有名な街などに因むもの、また酒場そのものを指す名称も存在する。

とりわけ目を引くのは、酒場の周り、あるいは酒場特有の様子を表すと思われる屋号である。ホレショヴィツェ地区にかつて存在した酒場「一軒家」などはその例である。この地区の他のビアホールの閉店時刻は22時が多いが、この「一軒家」は1991年当時は24時閉店であった⁶²。現在は建物そのものが取り壊されているが、今なお、周辺は空き地もあり、住宅密集地ではない。「店は工場・倉庫に囲まれており、他の住宅から離れてい

る」ことが謳い文句となっており、深夜でも営業ができたのであろう⁶³。

また、国民劇場裏手に現在も存在する「歌手乃屋」の場所には、1865年にレストランが開業し、ベドルジハ・スメタナ Bedřich Smetana (1824-1884) やアントニン・ドヴォルジャーク Antonín Dvořák (1841-1904) などの有名人が訪れていた。その中には、歌劇場の歌手や演奏家もあり、そのため、後に、「U Zpěváčků」(歌手乃屋)と名付けられた。ピアノも置いてあったと言われ、オペラ終演後、歌手たちが集まり、「打ち上げ」を行っていたのであろう⁶⁴。

4.2.4 人名に因む例

「ウ・フレクー」、「ウ・シュネルー」、「ウ・ピンカスー」、「ウ・ヴェイヴォドゥー」、「ボナパルト」など人名に因むものがある。ボナパルトはナポレオンに由来し、入り口のガラスにシルエットが描かれている。

「ウ・フレクー」は1499年に創業、1762年にヤコブ・フレコヴスキー Jacob Flekovský が権利を購入、妻ドロテアと息子シュテパーンとともに家族経営を開始、それにより「ウ・フレクー」U Fleků と称するようになった⁶⁵。

「ウ・ピンカスー」は、仕立て職人ヤクブ・ピンカス Jakub Pinkas (?-?) に由来する。1842年に開業したプルゼニュ(ピルゼン)のビール工場で新しい製法のビール(ラガービール)が作られ、1843年にそれをプラハの地に運んだことがこの店の由来とされる⁶⁶。

「ウ・ヴェイヴォドゥー」は、1745年から1757年までプラハ旧市街市長であったヤン・ヴァーツラフ・ヴェイヴォダ Jan Václav Vejvoda (1677?-1757) が、1717年、建物の所有者になったことに由来する⁶⁷。

「ウ・シュネルー」の建造物は、1779年、ドイツ系住民オンドジェイ・シュネル Ondřej Schnell (?-?) が所有したことに由来し、1811年に改築された。以来、シュネルとその子孫はこの場所で醸造業を営み、その後レストランとなった⁶⁸。

また、ヴィシェフラド近郊の「カレル4世亭」U Karla IV は14世紀のボヘミア王で神聖ローマ皇帝カレル4世 (1316-1386) の名に由来しているが、ボヘミア王で最も有名な歴史的人物のためチェコ国内多くの場所で見られる名称である。1945年に旧チェコスロバキアで発行された1000コルナ紙幣に肖像が使用されていたポジェブラドのイジー王 Jiří z Kunštátu a Poděbrad (1420-1471) に因む、「イジー王」U Krále Jiřího もプラハのみならず全国的に見られるビアホールあるいはレストランの名称である。

4.2.5 物などに由来する

「二つの心亭」、「二つの太陽亭」、「ウ・カリハ (盃)」などは「物」に由来する名称でこの例も多い。ビアホールではないが、「三本のヴァイオリン亭」U tři housliček (ウ・トゥジ・ホウスリチェク) は、ネルドヴァ通りにあるプラハを代表する由緒ある建造物である。17世紀から18世紀にはヴァイオリン製作家が居住しており、入り口



写真4：「三本のヴァイオリン亭」U tři housliček



写真5：二つの太陽亭 U dvou srdci
(ヤン・ネルダの生家)

上のバロック様式のフレームに交差した3本のヴァイオリンのレリーフは、18世紀初頭からのものである⁶⁹。ネルドヴァ通りには、このようなレリーフを持つ建造物が多く残されており、「金杯亭」U Zlaté číše (現在は古物商となっている)、レストランの「二つの心亭」、「二つの太陽亭」などにも正面入り口上にレリーフが飾られている。

「ウ・カリハ」U kalicha の建物は、1891年に建築家 ヨーゼフ・チェルニー Josef Černý により建てられた。当時は、住居であり、建物の入り口に金色の「盃」(kalich) の絵が描かれたことにより、建物が「ウ・カリハ」と称されることになった。後の所有者は、この絵を削除したが、それ以降も引き続き建物の名として残り、1907年、この建物に隣接しホステイネツ「ウ・カリハ」が開業した⁷⁰。

5. ビール醸造所

冒頭に記した通り、チェコは一人当たりのビール消費量が25年連続世界一で、その多くは国内生産である。ピルスナー・ウルケルやスタロプラメン、ブドヴァイゼル・ブドヴァルなど、国際的に認知された銘柄の生産量が多いが、近年、小規模の醸造所が次々に創業している。また、その多くは、ビアホールを併設しており、店内でビールを提供している。ここでは、過去の様相を紹介した上で近年の特にプラハ市内の醸造所を取り上げる。

5.1 チェコでのビール醸造の歴史

チェコでのビール醸造の歴史は古く、世界的に有名なプルゼニュ (ピルゼン) では、600年以上前に国王からの免許を受けビールを生産していたが、現在の主流である下面発酵の製法が伝わりピルスナータイプが主流となるのは19世紀に入ってからである⁷¹。1842年、現在、チェコビールを代表する「ピルスナー・ウルケル」のラガービールの製造が始まった。

ピルゼン近郊の街ドマジュリツェの醸造所は、1341年の創立で、1992年当時、現存する最古の醸造所であった。1919年市営となり、社会主義政権



写真6a: 「ドマジュリツェ市のビール醸造所」
Městský pivovar Domažlice



写真6b: 「判事」のラベル 写真6c: 「市長」のラベル

下では「西ボヘミア醸造所」"Západočeské pivovary"として国営化され、その後「ピルゼン醸造所」の、1994年、ピルスナー・ウルケル社の下部組織となるが、1996年廃業した⁷²。約四半世紀後の2020年、「ドマジュリツェ市のビール醸造所」Městský pivovar Domažliceとして再創業した⁷³。以前は、そのパイリン度あるいはアルコール度数により4等級に分けられ、軽いものから「書記」Pisář（ピーサジュ 8度）、「議員」Radní（ラドニー 10度）、「判事」Rychtář（リフターージュ 12度）、「市長」Purkmistr（プルクミストル 12度黒ビール）というユニークな名前が付けられていた⁷⁴。廃業後、「市長」という同名の銘柄が別醸造所より発売され、現在ではそれらの名称は使用されていない⁷⁵。

5.2 19世紀から20世紀の市内のビール醸造所

チェコでは伝統的に「ビールの壺買い」が行われていた。すなわち、家庭で消費するビールを毎日醸造所などに直接購入に行くというもので、松平氏によれば、1990年前後にはまだ存在していた。現在でも、後述するが、「ポチェルニャーク醸造所」のように計り売りの風習はある程度残っている。

19世紀から20世紀前半のビール醸造所の記録である「プラハの歴史的ビール醸造所～新市街」には、27軒の醸造所が記載されている⁷⁶。この中で現

在も引き続き生産を続けているには「ウ・フレクー」のみである⁷⁷。

新市街は、中世以来拡張した地域で、住宅地が徐々に広がり19世紀後半からは労働者の住居が多くなった地域である。そのため、多くの醸造所が存在したと考えられる。また、その多くは醸造所にシェンコヴナ Šenkovna（ビールを注ぐ意味）やトラクテル Trakter などのビアホールが併設されていた⁷⁸。

各醸造所はそれぞれ特徴あるビールを生産しており、20世紀前半の著名なコラムニストであるエドアルド・バスは、短編「プラハのシャーロック・ホームズ」の中で、実在のビール醸造所を挙げてビールの味での謎当てを描いている。住み込み家政婦（スルジュカ Služka）のマジェナが、仕事始めて初日、買い物途中でブラスバンドにつられビール壺を持ったまま道に迷い、主人の家に戻れなくなり、それを警察官がビールの味見をして醸造所を特定しよう、という話である。この中で、上記書籍の新市街に存在する、「ウ・プリマサー」U Primasů、「ウ・シェンフロクー」U Šenfloků、「ウ・フレクー」などの著名な醸造所名が次々と挙げられるが、うまくいかず、その後所轄警察の監督官が現れ一口飲むや目的は「黒醸造所」Černý pivovar（チェルニー・ピヴォヴァル）であることを突き止める⁷⁹、というストーリーである。それほど、当時の醸造所のビールはそれぞれ強い個性を持っていたことが鮮やかに描かれている。

5.3 1993年当時のプラハ市内の醸造所

1993年当時、プラハ市内に存在したビール醸造所は4カ所である。すなわち、プラハおよびチェコを代表するビールの銘柄スタロプラメンで有名な大規模ビール会社であるスミホフ醸造所（ヴルタヴァ川左岸住宅地スミホフ地区）、プラジャンなどの銘柄を生産していたホレショヴィツェ醸造所（住宅地ホレショヴィツェ地区）、現在でも一般に出回っているビール銘柄ブラニークを生産していたブラニーク醸造所（プラハ市郊外南部）、およびウ・フレクーである。うち、ウ・ウレクーの生産

量は、上位3社、「スタロプラメン」、「ホレショヴィツェ」、「ブラニーク」にはその生産量は遠く及ばず小規模な醸造所であった。

ホレショヴィツェ醸造所は1998年は操業を中止し、建物は現在ではオフィスセンター及び小売スペースなどから成る複合施設となっている⁸⁰。また、ブラニークは、2007年以来スタロプラメングループにより生産されている。

5.4 新しい小規模ビール醸造所

ラドカ・シュパツコヴァーはその学位論文中、2008年1月1日時点で、チェコ国内には65の小規模醸造所が存在し、年内にさらに5つの醸造所が開業すると述べている⁸¹。その数は、2021年現在では確認可能なものだけで356醸造所⁸²、プラハ市内に限っても、2008年には「ウ・フレクー」をはじめ8つの小規模ビール醸造所を数えるのみであったが⁸³、その後、急速に増加し、2021年の時点で53に上っている⁸⁴。

スタロプラメン（ブラニークを含む）を除くと、プラハ市内すべての醸造所は小規模で、市内各所に点在している。また、それぞれが独自に特色あるビールを生産し、醸造所内のビアホール提供している。

松平氏の著作に掲載されている「ウ・フレクー」、「仔熊亭」、「二匹の猫亭」、「ウ・ヴェイヴォドゥー」では、現在、自家製ビールを店内で提供している。「二匹の猫亭」には入り口にシェンコヴナあるいはトラクテルを思い起こさせる立ち飲み場所が確保されている。

上記のうち最も有名なのは、「ウ・フレクー」である。1499年創業のビール醸造所⁸⁵、1991年当時、プラハ市内に存在した4つの醸造所のひとつである。1991年にレストランが、1992年にビール醸造所が元の所有者であるブルトニーク家 Brtník に引き渡された後は⁸⁶、プラハを代表するビール醸造所兼ビアホールとなっている。席数は1200と非常に多く、いくつもの歴史的な部屋に分かれている。

「仔熊亭」は、ホテル経営も行っており、チェックイン時にウエルカムドリンクとして自家製ビールを提供するサービスがある⁸⁷。「仔熊亭」の建物名は、1466年に開始された醸造所の初期のビール醸造家の一人であるヤン・ネドヴィーク Jan Nedvídek に由来し、この建造物そのものは15世紀初めまで遡ることができる。1898年、一旦、市内の他の工場製造のビールとの競争により廃業した。その際、最後の醸造家であるカレル・ヴェンドゥラーク Karel Vendulák は、プラハを代表するビール醸造所であったホレショヴィツェ醸造所の所長となった⁸⁸。2005年、新装営業再開したが⁸⁹、



写真7a: 「二匹の猫亭」 U dvou koček



写真7b: 「モーツァルトがここに座った」と紹介

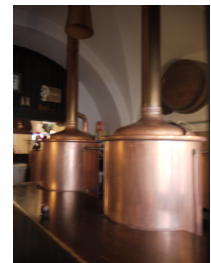


写真7c: 入り口脇に備え付けられた醸造施設



写真8: 「三匹の金獅子亭」 U tří zlatých lvů

「ビロード革命」15周年記念日である2004年11月17日に、ビール醸造を開始した⁹⁰。現時点での情報によれば、年間生産量3万リットルの「チェコ最小のビール醸造所」である⁹¹。

「二匹の猫亭」では、入り口を入ると、大きなビール醸造用タンクが置かれており、ビール注ぎ専門職人より直接ジョッキビールの購入が可能で、入り口付近の立ち飲みカウンターで、レストラン内料金とは異なる安価な値段で飲むことができる。1678年創業のレストランであり、カウンターの隅には「モーツァルトがここに座った」との表示がある。真偽は定かではないにせよ、1789年のモーツァルトのプラハ訪問では、「二匹の猫亭」向かいの建物「三匹の金獅子亭」に逗留しており、大いに可能性はあると考えられる。長らく、ピルゼン市の「ピルスナー・ウルケル」のみが提供されていたが、2010年に、小規模な醸造施設が店内に設営され、「猫」Kočka の名称で自家製ビールが提供されている⁹²。

このほかに、市中心部では、旧市街と新市街の境である国民大通り Národní (ナーロドニー) にある「国民(大通り)醸造所」Pivovar Národní があり、モダンな作りの非常に大きな店舗を構えている。2015年に創業、大規模なレストランで「チェコのライオン」Ceský lev (チェスキー・レヴ) という4種のビールを提供している⁹³。

観光名所の中心部に近いカレル橋近くに位置する「三本のバラ亭」U tří růží (ウ・トゥシ・ルージー) は、2012年に創業、15世紀からの建造物内に創設された醸造所とビアホールである。超小規模醸造所で年間生産量も1200-1500ヘクトリットルにとどまる。

新市街の住宅地兼商業地である地下鉄C線「イー・ペー・パヴロヴァー」駅付近のビアホール「醸造所」Pivovarský dům は、1998年開業、その名の通り店内にビール醸造施設を有し、8種類の自家製ビールを提供している。地元民、観光客ともに訪れるビアホールである。「プラハビール株式会社」Pivo Praha, Ltd (1991年創立) の所有で、独自の微生物学研究所と多くの種類の醸造用

酵母のコレクションを有し、ビール醸造に関し技術支援、技術プロジェクト、醸造所の工学技術の研究を行っている⁹⁴。

ホレショヴィツェ地区の醸造所「マリーナ」Marina は、近代的な醸造設備と大規模なビアホールを有している。ホレショヴィツェ港の近くに、2013年に開業し、4種類のビールを提供している。ホレショヴィツェ醸造所のビール、「ホレショヴィツェ地区のビール醸造の伝統を引き継ぐ」ビール醸造所である⁹⁵。

プラハ市東部に位置する住宅地に存在する「ポチェルニャーク醸造所」(旧鹿乃屋)では、2019年、店内および地下室に醸造施設を敷設し、ラガービール(バリング度11%⁹⁶)と上面発酵であるエール(バリング度13%)自家製ビールを提供し、持ち帰り販売もしており、0.5リットルの缶、1リットルのペットボトル、20、30および50リットル樽での販売も行なっている⁹⁷。駅前ではあるが、近隣に観光名所は無く、戸建て住宅やアパートメントが多い区域であるため近隣住民の利用が多い。

プラハ市北部の住宅地および大規模なプロヴカ総合病院の近隣に位置するプロヴカ醸造所 Pivovar U Bulovky は、2004年に創業した個人経営の醸造所である。同名のパブで、ドイツタイプのライトラガー、白ビール(ヴァイスビア)、黒ビールの3種を提供している⁹⁸。

ドイツ語圏では西暦8世紀頃から修道院でのビール作りが行われており⁹⁹、バロック建築の図書館で有名なストラホフ修道院でも600年以上前からビール製造を行っていた¹⁰⁰。いったん途絶えるものの、2000年、ストラホフ修道院醸造所 Klášterní pivovar Strahov では新たにビール醸造を始め、現在、銘柄に聖人「ノルベルト」Sv. Norbert の名が冠された25種類(季節物を含む)のビールを生産している¹⁰¹。

現在では、プラハ市内はもとより、チェコ国内各地で新興のビール醸造所が創業している。数世紀にわたり伝統を築いたチェコのビールの歴史は、近代化と社会主義時代に国営化されたことによりほとんど途絶え、その後の経済混乱期を経て、今

日、以前にも増して個性豊かな様々な種類のビールを提供している。

結びに変えて

松平誠氏の「プラハの浮世酒場」を手にしたのは1990年代前半のことで、以来、プラハを訪問する度に持ち歩き、いくつものビアホールをはしごした。ドイツ留学中はただビールを楽しむだけであったが、チェコ独特のビアホールの屋号に興味を持ち、また、松平氏が体験した時代から四半世紀が過ぎ、一度、それらのビアホールが現在どうなっているのか知りたくなった。幸い、2017年、2019年の2回それぞれ3ヶ月ずつプラハに滞在することができ、本業の研究の合間に氏の書籍に記載されたビアホールを一軒一軒訪ね歩き、特徴や情報を記録した。その記録は膨大なものとなり、整理するまもなく放置されたが、ようやく今になりそれらの情報をつなぎ合わせ、さらに、追加資料を分析し最新の情報を収集した。

ビロード革命直後の1990年代初頭から四半世紀、多くの観光客が訪れるようになり、また、経済的にも安定し、チェコは旧東欧圏では最も豊かな国一つと言われるようになった。当然ビアホールも変遷し、改修しているものの以前と同じような雰囲気のお店、全く異なっているお店。そして廃業、建物取り壊しなど、様々な運命を辿ったビアホールがあった。

社会主義時代末期、プラハ市内では大規模工場であるスタロプラメンを始め、醸造所は合計4社のみであったが、今や市内だけで53を数えるまでになった。これからもプラハ、そしてチェコのビールは人々に愛され、また、魅力的な歴史ある"Pivnice"は、これからも市民や観光客の集う場所を提供することになると思う。これから25年後、今度はどのような変化が訪れるのか、非常に楽しみであると同時に、奥深いプラハのビアホールと醸造所の歴史をさらに深く研究してみようと決意を新たにした。

冒頭に記した通り、この種の研究は文書として発表するのは極めて困難である。ともすると、観

光案内やビアホールの紹介になってしまう。"Pivnice"を研究題材としてできる限り情報出所を明らかにし、また、自身で足を運び確認作業を行う、という方法でまとめたものである。チェコ語の乏しい知識を駆使し、また、場合により居合わせたドイツ語や英語の「通訳」を通しての取材となった。したがって、不正確な部分もあると思われるが、このような研究の性質上ご容赦願いたい。

プラハ滞在中に直接取材をさせていただいた醸造所、および醸造所の関係者、問い合わせに快く応じてくださったキリンビール株式会社の担当者、研究の助言をいただいた日本チェコ協会関係者の皆様に感謝いたします。

※ビアホールなどの名称に関して

チェコ語では形容詞、名詞ともに通常は小文字で始めるためそれにしがたった。しかし、人名や地名に由来する名詞、あるいは固有名詞、あるいはそう思われる名称に関しては冒頭文字は大文字とした。不明な名称に関しては、固有名詞に準じた。

※カタカナでの表記

チェコ語の発音をカタカナで表記することは極めて困難である。比較的近いと思われる音で記載したが、場合により広く一般的な名称とは異なる場合がある。

※ビアホールの名称の日本語訳

意味をはっきりさせるためできる限り日本語訳し、比較的一般的な「亭」や「屋」といった屋号を付け加えた。観光案内などでは、チェコ語のカタカナ表記がそのまま使用されている例も多い。また、本稿内でも広く知られ用いられている名称、例えば「ウ・カリハ」のようなものはそのままカタカナ表記とした。

※写真について

本項で使用した写真はすべて著者自身の撮影によるものである。また、使用した地図に関しても著作権フリー素材を使用している。

¹ キリンビールにこの統計に関し問い合わせたところ、この統計は、世界人口白書の人口統計に基づきビール消費量を元に計算したもので、単純に考えれば観光客の消費したビールの量も含まれる。それを考慮してもチェコ人の一人当たりのビール消費量は非常に多く（192ℓ）、2位オーストリア（108ℓ）、3位ドイツ（102ℓ）の約2倍、我が国（40.2ℓ）の5倍近い消費量である。

² <https://www.kirin.co.jp/alcohol/beer/daigaku/ECN/ecn/no5/>, 2021.8.15

³ 2011年、第1位はドイツ（38.1万t）、中国、アメリカに続く。

⁴ 松平誠、「プラハの浮世酒場」、岩波書店 1994

⁵ 屋号に関しては第3章で詳述する。また、初出時にのみ、チェコ語での読み方を併記した。

⁶ 松平, pp. iii-iv

⁷ 松平, p. 151

⁸ ドイツ語の "Stammgast" (シュタムガスト) の流用、チェコでも一般的に使用されている用語。

⁹ 松平, pp. 40-49

¹⁰ 松平, pp. 147-158

¹¹ 松平, p. 154

¹² 「ウ・カリハ」は、すでに世界的にこの名称で知られているため、あえて日本語「盃亭」には訳さず、「ウ・カリハ」と記述する。

¹³ シェヴェイク博物館では、ハシェクに関係するかつて存在したビアホールの研究成果を公表している。 <https://www.svejkmuseum.cz/hospody.htm>, 2021.8.25

¹⁴ <https://cs.praguemap360.com/prazska-mapa#.YSX4CS33J0s>, 2021.8.25, "Pražská mapa", 著作権フリーの地図である。

¹⁵ チェコ語で "zvěřina" は、「野生動物の肉」を表すが、この屋号は所有者 ズヴェルジナ Zvěřina に由来するためカタカナ表記とする。

¹⁶ 松平, p. 111

¹⁷ 松平, p. 111

¹⁸ ハシェク (2012), p. 280

¹⁹ 非常にモダンな作りのレストラン、伝統的なプラハのビアホールの面影は皆無である。平和広場（ナーミェステイ・ミール）に面した場所に存在する。2017年10月4日訪問

²⁰ ヤロスラフ・ハシェク、「兵士シェヴェイクの冒険」【原題は "Osudy dobrého vojáka Švejka za světové války" (世界大戦中の善良な兵士シェヴェイクの運命)】上, 筑摩書房 1968, p. 447

²¹ 1963年になりようやく発刊、日本語版「プラハ冗談党レポート—法の枠内における穏健なる進歩の党の政治的・社会的歴史」, トランスビュー 2012

²² ハシェク (2012), p. 76

²³ ハシェク (2012), p. 27

²⁴ ハシェク (2012), p. 480

²⁵ ハシェク (2012), p. 73

²⁶ ハシェク (2012), p. 197

²⁷ 松平, p. 108

²⁸ <https://www.restu.cz/restaurace-u-zpevacku/>, 2021.8.26

²⁹ アンリ・ボグダン、「東欧の歴史」, 中央公論社 1993, p. 622

- 30 1997年、ビール友の協会 Sdružení přátel piva に改称、政治活動を停止した。現在は、ビールを中心とした教育・啓蒙活動を行う組織となっている。http://www.prateleypiva.cz, 2021.8.18
- 31 松平, p. 138
- 32 以下、ドイツ名である「ピルスナー・ウルケル」と称する。
- 33 1918年以前より存在した。1926年、ピルスナー・ウルケルと契約。
- 34 通りの名は "Nerudova" であり、「通り」の意味はすでに含まれているが、ここでは明確さを優先し、「ネルドヴァ通り」とした。
- 35 4階建てアパートの1階にあり、1800年前後に作曲家のヴィンツェンツ・マシエク (1755-1831) が住んだ記録があり、建物自体も数百年の歴史を持つ。
- 36 前置詞のみの改称のためこのカテゴリーに入れた。
- 37 松平, p. 8
- 38 松平, p. 8
- 39 松平, p. 9
- 40 U Medvídků は複数形であり、正確には「仔熊たち」の意味である。
- 41 ヴェイヴォドゥー は「公爵」の意味もある。名称の由来は第3章参照のこと。
- 42 「牡猫亭」に関しては、別章で触れる。
- 43 ハシエク (1968), p. 11
- 44 「ウ・プリンツェ」の名称が一般的のため、今後この名称で統一する。
- 45 様々なネット上の口コミを参照すると、全体的にかなり費用が高く、評判が悪い。ビール価格もこの店舗が特別とも言える。
- 46 当時は、"Spornergasse Nr. 233" という住所であった。
- 47 http://pivovarpocernak.cz/about/, 2021.8.15、同醸造所に関しては第4章で詳述する。
- 48 2019年9月23日訪問取材。
- 49 https://www.restauracekravin.cz/nase-restaurace/, 2021.8.15
- 50 https://zpravy.aktualne.cz/ekonomika/ceska-ekonomika/slavne-prazske-pivnice-pruvodce-1989-2010/r-i:gallery:17406/r-i:photo:340650/, 2021.8.16, 1341年創業のドマジュリツェの醸造所は、いったん廃業するものの2020年に新たに開業した。
- 51 一般的にはドイツ名で呼ばれることが多い。
- 52 松平, p. 61
- 53 松平, p. 39
- 54 同上
- 55 伝統的な街の中心は「旧市街」および「新市街」で、ヴルタヴァ川右岸である。王宮であるプラハ城は左岸であるが、ヴルタヴァ川の下流方面で、そこより上流のスミホフ地区は、20世紀前半は住宅地と農村風景が広がっていた。
- 56 Stanislav Musil, "Sláva a zánik starých pražských pivovarů, 2 díl - Nové Město" (プラハの古い醸造所の栄光と終焉, 第2巻 - 新市街), Praha 2013
- 57 チェコ語は7格(主格、生格、与格、対格、呼格、前置格、造格)まであり、続く形容詞や名詞は語尾変化をする。
- 58 https://cs.wikipedia.org/wiki/U_Staré_školy_(Praha), 2021.8.19
- 59 ヴィシエフラドはヴルタヴァ川上流の中世の城跡で、地区の名称にもなっている。ベドルジハ・スメタナ Bedřich Smetana (1824-1884) の「わが祖国」第1曲「ヴィシエフラド」は、この地名に由来する。
- 60 スメタナの「わが祖国」第3曲「シャルカ」もこの地の伝説に基づいている。

- 61 2017年9月30日訪問取材。
- 62 松平, p. 86, 開店は午前6時で、これはこの地区では必ずしも特別ではなかった。
- 63 松平, p. 87
- 64 <https://www.restu.cz/restaurace-u-zpevacku/>, 2021.8.26
- 65 同上
- 66 <http://www.upinkasu.de/pd-geschichte/>, 2021.8.17
- 67 "Dny evropského dědictví MČ Praha 1, 1998-2007" (「プラハ1区のヨーロッパ遺産」), p. 144, それ以前は、1630-1670年にプラハ市長であったトゥルクにちなみ、"Turků" と称されていた。
- 68 「プラハ1区のヨーロッパ遺産」, p. 139, それ以前は、この建物は "U Zlatého čápa" (「金のコウノトリ」) と称されていた。
- 69 <https://www.welcometoprague.eu/house-at-the-three-little-fiddles>, 2021.8.17, 現在は中華料理屋になっている。
- 70 現在は、Na Bojišti 12番地、1732番地は、当時区域ごとに建物に通し番号がつけられていたことによる。現在でも、両方を併記する場合が多い。
- 71 春山行夫, 「ビールの文化史2」, 平凡社 1990, p. 225
- 72 <https://www.pivovardomazlice.cz/pivovar-2/>, 2021.8.24, <https://www.domazlice.eu/mestsky-pivovar-domazlice/historie-pivovaru-/>, 2021.8.24, 2019年9月25日、ドマジュリツェを訪問、歴史博物館(旧ビール醸造所)を訪れ、取材を行った。その際、1341年からの歴史、および2020年からの再創業に関して関係者より説明を受けた。
- 73 <https://www.pivovardomazlice.cz/o-nas/>, 2021.8.24
- 74 それら全てに "Domažlický" (ドマジュリツェの) という形容詞が付けられている。なお、Písař、Radní はチェコ語語源、Rychtář (Richter/ドイツ語の判事)、Purkmistr (Bürgermeister/ドイツ語の市長) はドイツ語語源の名詞である。
- 75 2019年9月25日の取材による。
- 76 Musil, p. 3-4
- 77 Musil, pp. 141ff.
- 78 松平, p. 67
- 79 松平, p. 120-124
- 80 <http://www.pivovary.info/historie/pa/holesovice.htm>, 2021.8.16
- 81 Radka Špačková, "Tradice a rozmístění malých pivovarů v České republice" (「チェコ共和国における小規模ビール醸造所の伝統と展開」), Olomouc 2008 (オロモウツ・パラツキー大学), p. 19, 小規模醸造所の定義として年生産量3000hl (300キロリットル) と述べている。
- 82 <https://zachranpivo.cz/minipivovary/kraj-praha>, 2021.8.28
- 83 Špačková, p. 55
- 84 <https://zachranpivo.cz/minipivovary/kraj-praha>, 2015.8.15
- 85 "U Fleků", p. 7
- 86 "U Fleků", p. 8
- 87 "0,33 l domácího piva Oldgott" (0.33リットルのオールドゴットビール) を提供, <https://umedvidku.cz/cs/hotel/>, 2021.8.15 閲覧
- 88 同上
- 89 <https://umedvidku.cz/de/brauerei/geschichte-und-herstellung-von-bier/>, 2021.8.15 閲覧
- 90 同上

91 同上

92 <https://www.prague.eu/en/object/food/340/restaurace-a-pivovar-u-dvou-kocek>, 2021.8.15

93 2017年9月29日訪問取材。

94 <https://www.pivopraha.cz/en/>, 2021.8.15

95 <http://www.pivovarmarina.cz/#pivovar>, 2021.8.19, 2017年9月1日訪問取材。

96 バリング度：発酵前の麦汁の濃度

97 <http://pivovar pocernak.cz>, 2021.8.16

98 2017年9月29日訪問取材。

99 春山行夫, 「ビールの文化史1」, 平凡社 1990, p. 82

100 https://de.klasterni-pivovar.cz/our_story, 2021.8.17

101 同上

参考文献：

ハシェク, ヤロスラフ (栗栖継訳), 「兵士シュヴェイクの冒険」上巻, 筑摩書房 1968

ハシェク, ヤロスラフ (栗栖継訳), 「プラハ冗談党レポート—法の枠内における穏健なる進歩の党の政治的・社会的歴史」, トランスビュー 2012

春山行夫, 「ビールの文化史2」, 平凡社 1990

ボグダン・アンリ (高井道夫訳), 「東欧の歴史」, 中央公論社 1993

松平誠, 「プラハの浮世酒場」, 岩波書店 1994

矢田俊隆, 「ハンガリー・チェコスロヴァキア現代史」, 山川出版社 1978

Musil, Stanislav, "Sláva a zánik starých pražských pivovarů, 1 díl - Staré Město" (プラハの古い醸造所の栄光と終焉, 第1巻 - 旧市街), Praha 2012

Musil, Stanislav, "Sláva a zánik starých pražských pivovarů, 2 díl - Nové Město" (プラハの古い醸造所の栄光と終焉, 第2巻 - 新市街), Praha 2013

Musil, Stanislav, "Sláva a zánik starých pražských pivovarů, 3 díl - Malá Strany, Hradčany a Vyšehrad," (プラハの3巻 - 小地区、フラッチャニとヴィシェフラド), Praha 2015

Pivovar a restaurace "U Fleků", Praha 2002